

## “ナニカ・ドコカ変”を覚えるとき

加古 明子

### プロローグ

関東大震災の翌年（一九二四年）、両親は田園調布に小さな家を持ちました。放射状に伸びる街路にはゆったりとした区画ができ、垣根なしに家と庭を配した街、全体が公園のようにとお互いに心した街作り、「遠くの親戚より近くの他人」センスでのつ

きあいが不文律であったと聞いています。

昭和二年に兄、七年に姉、次いで九年の夏に私と、三人ともここに生まれ、育ちました。

遊び歩いていてお腹がすいたりトイレに行きたくなると、手近の家に駆け込みました。子どもがいる家庭が少ないので、いろいろな家のオトナが子ども達を大事に考えて相手をして下さる風がありました

た。いわゆる西洋館が多く、外国生活や文化を持ち込んでの暮らしを垣間みるので、ごく自然に、西欧文化に触れられる街でもありました。

十人兄弟の長男の父は官吏で、夜学でも電気工学を講じていました。母は三人姉妹の長女で、卒業以来ずっと大学の教職にいましたから、今言う共働き。七十五年前の草創期、この街に自由を求めて入植したのには、どちらの実家にも属さない強い意思と決断を要したと思います。手伝いの人が複数いて、書生さんのような人々や学生さんなど、オトナの出入りが多い家でした。そのうえ、両親は信仰をもっていて、近くに伝導所を設け日曜学校を開いていました。当時、共働きしてまで暮らし方を変えていこうとしたことを、スゴイと思います。

おかげさまで、誰もが微笑みかけてくれるものだと思います。

その一 そんなツモリじゃ、ないのになあ

家から道一本裏に、幼稚園がありました。倉橋惣三門下の姉妹が大キイ先生小サイ先生でした(当時の幼稚園就園率六・六パーセント)。兄も姉も通ったので、私はわが家の続きのような気で、親しんでよく遊びにいました。

道から石段数段上がると園舎、下がると園庭。玄関を入ると左側にコートをはける小部屋があり、右側には給食設備のあるキッチン(右回りに先生の住宅部へ)。広いすべすべの廊下の突き当たりには小部屋とトイレ、左に折れて保育室が二つ。大きい方の保育室には、厚い扉の内部に大型積み木がびっし



り。コート部屋と積み木を出した後の空間が、特に魅力的な場と印象に残っています。

いよいよ私の番がきて、母が正式に入園手続きに行くのと、「この間、独りで断りに来ましたよ」とのこと。「オシヤマだから、幼稚園には行く必要ない」と誰彼がからかったのを本気にした……。しかしいざ入園すると、一つ上の先輩に、あれはダメ！ これを触らないで！ とやられ、ちよつと触ったクレヨンを「盗った」とさわがれて、たちまち幼稚園嫌いになりました。絵の先生が来られる日だけが好きで、同級生（十二名？）との園外交流、「友だちうちへ行く」「友だちが来るよ」が盛んに。特に、戦争と絡まってか、インド・カナダ・ハワイ・中国などの国籍の子どもがいたので、ことばはぐちゃぐちゃ、遊びも習慣や食べ物も違うからなお面白かったのでしょうか、仲良かたまっては、「上の連中」とぶつかりました。自分のツモリが強い分、人のツ

モリをドコカ ヘンと思いつながらも、飲み込みはじめました。

その二 花ちゃん、今 どうしている？

誰やらの運転手さんが住んでいたと言われる家に、花ちゃんが現れました。子守に雇われてきた、今で言うすこし遅れのある子ども。「あの家には近づかないように」と近所で云々された事情は、なんとなく知るようになるもの。

その花ちゃんは、とにかくどこでも私にくっついてくる、幼稚園までも探しに来て呼ぶので、私が出ていくしかない。床下の子猫を見に行くと背中の子猫がつかえて泣くし、画用紙もお手玉も持たないので「ちよーだい」「いいよ」、おやつも半分にして、時には赤ちゃんを背負ってあげて……。でも、帰ると花ちゃんは叱られていた。その様子が表に聞こえるし、道にいつまでもしゃがんでいたりする

から、なんだかたまりませんでした。いつしか、花ちゃんをかばう感じになり、花ちゃんがらみの秘密事や物かくし場を抱えるようになりました。なか、困るけれど断れないで、……？

小学校三年次のこと。それまで事あるごとに担任が花ちゃんに当たり、「理不尽」を覚え始めた頃でもありました。忘れ物常習の花ちゃんに、私の教科書を貸したのですが、自分の忘れ物をごまかしたとひどくのがめられました。でも、言い訳せず、親にも黙ってとおしました。折も折、その学校では、私学志願者の「優」を公立志願者に「売る」と言う不祥事が明るみに出ました。姉は六年生で「優」を減らされた方で、二人とも私学へ転校。

おとなが見せる陰や差別感、意外に子どももの目にはつきりと映るもの。子どもがおとなを、切り捨てるが始まるわけです。微力ながら、保育者・教員養成に関わってきたのは、花ちゃんとの少し苦

い思いでが働いています。

その三 どうしても「嫌だった」のに

満洲事変・日中戦争と時代はどんどん戦争の色を濃くしていきました。「贅沢は 敵だ」「欲しがりません 勝つまでは」の標語のもとで、もはや子どもは銃後の一人として、少国民の語に変えられました。敵性語である英語は禁止となり、外国製の玩具も排されました。思想・文化統制により、絵本さえ検閲があり国策に沿ったものだけが出版を許される時代でした。十六年十二月大東亜（後に太平洋）戦争勃発、国民総進撃！。

セルロイドのキュピーさんは、敵国生まれです。文化映画の中で、不用品を焼く子ども役をさせられました。顔がへこんでしまった私のキュピーさんを、最後に火に投げ込むように指示され、練習が進みました。でも、「嫌そんなことやれない！」のに。

抗議もできないし、止めてくれる人もいません。とうとう、本番。火がつき煙が立つ中で、練習通りに役を終えました。セルロイドの燃える刺激臭と悲しさ・やるせなさ・くやしさで、涙が止まらなかつた。封切りを渋谷の映画館に観にいきましたが、涙で……。

「供養もあつて、子どもと遊びとおもちやの関わりを今でも追究しています。」

#### その四 罪作りの棘

「見て 見て、これいいでしょ！ インドのおみあげ」。その朝、いつも渋谷駅から一緒に通うSさん



Tさんに、私は派手な模様のある皮財布を見せました。帰りに寄るお琴の先生で支払う分のお金がいっつもより余分に入っていたので、りぼんでスカートに結んでもらっていました。

体操の時間が終わった後、別の友だち達がお財布見せてと寄ってきた時、りぼんがちぎれて財布が無くなっていました。ワイワイと先生に四、五人が告げにいきますと、先生はいつにない厳しい表情と語気で、「今から机の中を検査するから、廊下に出るように」と言われました。しばらく経って、他に二人の先生方が教室に入れられ、私たちはまたずっと隣の教室で待機を命じられました。

文鎮・墨・刺繍入りハンカチ・いくつかの財布など級友の品々が、それぞれに戻されました。私のがきっかけでの事。みな、おし黙っていました。先生はすでに、案じられた事態だったのでしよう。誰もSさんと再び逢うことはなくなりました。

その夜、「あなたが自分の物を失うのはかまわな  
いが、他人に罪を犯させるような置き方や持ち方を  
してはならない」と母に諭されました。言われるま  
でもなく、棘はささっていました。

渋谷駅頭で、無意識に人を探す自分にふと気づく  
ことがあります、今もって。

その五 わかっていたツモリが

幼稚園時代のMちゃんがS君が敵になった。

なぜ？ と問えない戦時下でした。“鬼畜米英”

“撃ちてし 止まん”と本当に信じるようになって  
いきました。

一方で、銃後のつとめと誇りをもった意気込みも  
ありました。宮城 道雄門下の先生に姉と共に琴を  
習っていました。「さくら変奏曲」を軍人会館（現  
九段会館）や日本青年館で、紋付き姿のおとなのほ  
んのお飾りのように姉と振り袖を着て加わったりし



ました。手の及ばぬ箇所は手を止めていましたが、  
背後から変化に富む大合奏に包まれるのがなんとも  
素晴らしく誇らしく思ったものです。傷病兵の慰問  
や軍関係の行事で、子どもの琴合奏や童謡を歌うこ  
とが何回か続き、珍しい御菓子や文具のご褒美が嬉  
しくて大はりきり。

十九年八月四年生の時、都会から学童を離すため  
の策がとられ、学校単位の集団疎開が始まりまし  
た。私は少し健康を害していたので、八月末から甲  
府の知人宅へ独りあずけられ、二十年一月〜十月ま  
では軽井沢の集団疎開に合流しました。四月には一  
年生が現地入学し、さらに幼児達が疎開保育所に集

められました。痛ましい幼さでした。

集団生活が長くなると、喧嘩・いじめ・嘘・ボスと子分関係なんでもありました。また、夜尿症や持病・障害のある子、盗癖や脱走など問題が次々起こって、子どもなりに大変な経験の連続でした。

が、先生方の御苦労は測り知れません。親は担任に、墓所書きや預金通帳と判、中には遺書を託した人もあったとききます。「百の子の 百の心に 夏の風」は校長先生のご心境を詠んだもの。

疎開へ行く前夜、母は私を前に座らせ（父はすでに昭南島「シンガポール」へ軍属出征中）、「いざ」という時の死の作法を教えました。一振りの短剣の柄に晒しを巻き付け、腰紐で膝を二重に巻いて縛り、左腿の上に立てて、自分の身体を折って……と。「いざって、どうしてわかるの?」「その時が来たら、わかります」なんとも言えない門答。「右ではないのよ、左のここに」と母が私の太股をさわっ

て位置を教えた感触は忘れられない。

「なんとしても、生き残れ」と教えられた友だちもあつたし、一服の薬を渡されていた人もあつたとは、後に知ったことです。

担任の先生からの呼び出しでは、家族の悲報や家の焼失が告げられ、互いに励まし合うのが精一杯。八月初めに、家族で広島へ移ったYちゃんが一家で散った時には、みんな涙も枯れ莫たる不安に襲われました。

敗戦は五年生の夏。

その六 新しく見えてきた事へ

戦後学校が再会したのは十月。まず連日、先生の指示に従って教科書の戦争関連記述指定を墨で塗りつぶす作業。見開きはほとんどが真っ黒になることもありました。いつなんどき、進駐軍の兵隊が鞆を調べて難癖をつけどこかに連れて行かれるかも、と

の噂に怯えたこともありましたが、そのようなことは起きませんでした。

それよりも、大學の付属校だからか教育関係視察の外国人がしばしば学校に来られ、生徒は英語で話しかけ（通訳を介して）られてどぎまぎしたり、音楽劇や合唱、リトミック等を演じることが多くなりました。いつも終わると、ニコニコと大拍手が起り、握手せぬ。

鬼畜米英ってなんだったのか、撃ちてし 止まんなんてどんどん消えていきました。でも、通学途上に見かける進駐軍の兵士たちへの怖さは拭えず、緊張した時期が続きました。

田園調布の街は焼け残った家が多く、進駐軍用に次々接収されていきましたが、わが家は小さいのががれていました。のがれた家には、兄達の年代が親睦会を作り集まるようになりました。英語に堪能な人もいて外人さんが混ざったり、ピアノや戦前の

レコードでダンスレッスンが始まり、コーラスも聴かれました。若いオトナたちの楽しそうな雰囲気は憧れ、早く仲間になりたいと思ったりして。

しかし、父はまだ抑留解けず、ラジオの引き揚げ便りで復員船情報をみなで注意をしていました。翌二十一年三月四日十時過ぎ、玄関の呼び鈴が父独特のリズムで鳴りました。一瞬間を見合った後、殺到。「あなた 足がありますか？」と母。やっと、四年半ぶりに父が帰宅しました。わが家の終戦。

ところが……。その頃、上野駅で疲弊した引揚者の方々を、一杯の味噌汁で迎えよう運動が女性の二十団体で始められました。同胞援護婦人連盟結成。急造の二階建て小屋に満洲からの孤児達の救済活動も始動しました。

遊び相手でもと気楽な気持ちで母について行くと、湿疹だらけの幼児や凍傷で手指・足先が深く傷んで立てない子どももいたし、同年齢の子がおとな



のような口をきき、同じ子がオネエチャンときゅつと抱きついて離れなかったり、奥の方でただじつと動かない少年やにらむように見るだけの子どもなどなど、戦争が終わっていない子ども達でいっぱいでした。特に悲惨な目に遭ったわけではない私でも、「戦争」はきつかったが、それがこの子らの過去をいかに苛酷にしたことかを、おぼろげながら感じて心底震えました。

やがてここは「子どものうち」となり、(現在五十四年目に)、新制中学に入ってから、友だちとこの傷病児収容先を見舞ったり、資金集めに街頭募金に加わったり、りんごの袋はりをしたりと関わ



りを持ちながら……。

私の子ども時代は、急速に終わっていきました。

### エピソード 人さまざま・事さまざま

「全てのこと あい働きて 益となす」は、いつか私の軸となりました。また「嫌な鷹には 餌を変えて」と言うよ」と父に言われたこと。鷹匠の言葉で、気の合わない鷹には特別良い餌に変えるようにといった意味。気性激しいところが、本音でしか生きられない生き下手な私への一言として、度々心に甦ってきます。

生かされる・活かされる筋立てに、多くの人・事が働いている意味を、改めて味わっています、有り難く、有り難し。

(同胞援護婦人連盟理事)